

郷土資料館だより

Vol. 23. No.1
2000. 10. 1

稲荷神社 (新谷)



風祭りの日の礼拝 (2000.9.1)

風祭 (かざまつり) と暦

毎年、9月1日から2日ころの二百十日の前日には「風祭」と称して、氏神に村人が参集して祈願した後にナオライすることが習慣になっている集落は三島でも多くあります。

この時期は稲の開花期にあたり、台風襲来を警戒すべき日として暦に掲載されたことで、各地に広まった民俗ですが、同じ風祭でも地域により、実施時期や祀り方に相違が見られます。

ヤマのムラ中伊豆原保・地蔵堂・菅引などでは7月中旬に行っています。山葵栽培の盛んなところであり、台風による山葵田被害は甚大であるから、~~山葵田~~ 台風の季節に先立って風を鎮めておこうという意味があるのだそうです。

下田市の稲生沢一体では、昔は3月から4月にかけての頃に早々と氏神さんの風祭を済ませておいたといいます。こうした民俗事例を見ると、早めに実施するのが古い習俗であったように思われ、二百十日や二百二十日前後に風祭をおいたのは後世のことのようです。

(以上は『静岡県史』23より)

ところで二百二十日は、旧暦の中でどのように扱われているのでしょうか。

旧暦は毎月の日数を太陰暦(月の運行、すなわち月が地球の周囲を回る周期)によって決めていたので太陽暦による季節とずれが生じ、それを補うために、二十四節季や五節句、雑節と称される暦注等を書き込んで季節の目印としていました。二百十日や二百二十日は、そうした雑節のひとつとして、稲やその他の農作物を台風の被害から守るための季節の目安として暦の中に取り入れたものです。

二百十日、二百二十日は立春から数えて二百十日目及び二百二十日目をいい、新暦では9月1日、2日と9月半ばがあてられますが、陰暦では年によって日取りが移動するので、注意を喚起するために暦の中に配当されました。

昔から、八朔(陰暦8月1日)とともに、二百十日と二百二十日は三大厄日として恐れられました。

職人の信仰—聖徳太子信仰と太子講

三島の職人たちの多くは、聖徳太子を信仰し、聖徳太子を祀る太子講を盛大に催しています。この聖徳太子信仰についてご紹介します。

(1) 畳職人の聖徳太子信仰



聖徳太子像
(栄町 梶畳店)

三島広小路駅近くの二代続いた畳店で、きっぷのいい畳職人さんから「私たち職人の守り神は聖徳太子さんですよ。神棚に飾り、毎月1日と15日は必ず、お酒とご飯を上げてますよ。」という話を聞きました。

そのお宅では、仕事場のコンクリートたたき奥の小座敷にある神棚

に、伊勢神宮、三嶋大社の御札のかたわらに祠に入った聖徳太子木像を祀っていました。

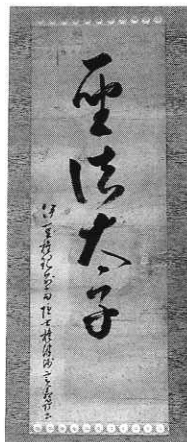
像は高さ 10cm ほど、祠の裏に昭和 37 年 (1962) に先代夫妻が祀り始めたことが墨書されていました。病がちだった先代のために、親戚の人が彫ってくれた像とのこと。いかにも素人の彫りですが、やさしい顔をした聖徳太子像です。

先代は畳職人の親方で、年季奉公の職人を何人も抱え、多くの仕事をしたといえます。当時は毎朝全員で太子さんを拝んでから食事となりました。

また昭和 30 年代まで、沼津・三島・伊豆長岡の畳職人組合では、太子講 (聖徳太子を祀る) を正



沼津・三島・伊豆長岡畳職人組合が信仰した
聖徳太子像 (左)、聖徳太子掛軸 (右)



月、5月、9月に催していました。

このとき親方衆などは「太子講」と染め抜かれた揃いの法被を身にまとい、宴会場の床の間に「太子講」と書かれた掛軸と、聖徳太子木像 (十六歳孝養像 高さ約 30cm 祠入り) を飾り、食事や酒を供えました。太子講を始めるにあたり、組合長から太子像へ感謝の言葉が奉じられ、一同礼拝のあと、宴会になったといえます。

このように聖徳太子への信仰「太子講」は、広い範囲に散らばる職人たちを一つにまとめる大事な紐帯となっていたようです。

しかしこの畳職人の太子講は、昭和 40 年代には行われなくなり、現在は職人たちの慰労会となっています。

(2) 三島の太子講



太子堂 (三島市 広小路町 蓮馨寺)

三島の建築関係の職人たちは、蓮馨寺 (市内広小路町) 本堂の東に立つ太子堂を拠り所としています。現在でも正月・5月・9月の11日は、太子講を催し、市内の職人の親方たちが集い、本尊聖徳太子像 (十六歳孝養像、木像彩色) に蓮馨寺住職による経が唱えられます。

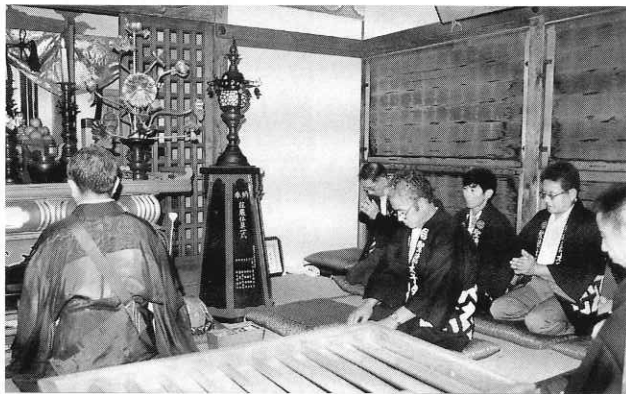
特に5月は大祭で、夕方の直会 (なおらい) のあと、本堂前にしつらえた舞台上で、歌謡曲・民謡などが唄われ、餅をまくなど夜遅くまで続く賑やかな祭りとなっています。



聖徳太子像
(蓮馨寺 太子堂)



太子講での職人による芸能披露
(蓮馨寺境内)



太子講 (蓮馨寺 太子堂、9月11日夜)



聖徳太子像
(沼津 長谷寺)

この太子堂は、大正 11 年 (1922)、三島の建築関係の職人たちが資金と労力を提供し、技術の粋を尽くして建築したものです。

この年は聖徳太子没後 1300 年記念の年で、全国的に聖徳太子に対する尊崇の念が高まっていました。

また沼津においても、昭和 27 年 (1952)、長谷

寺 (千本緑町) に沼津の職人達が太子堂を建立し、毎年正月・5 月・9 月の 11 日午後太子講を催しています。

(3) 職人達の太子信仰

三島の職人達が集まるこうした太子講の他、それぞれの職人組合や、一人一人の職人が聖徳太子を祀っています。

三島大工職人組合では、聖徳太子の掛軸を蔵し大工職人の新年会などの時に飾っています。作業場に太子講のお札を貼り毎朝拝礼してから仕事を始める大工もいます。

三島^{とび}鳶職人組合では「聖徳太子」と書かれた掛軸と聖徳太子二歳像を所蔵し、一年交替で当番の家へ預けられます。当番の家では、床の間に掛軸と太子像が飾られ、毎朝、酒・お茶・ご飯を上げています。(写真右上) 危険が多く、縁起を担ぐ鳶職人ならではの熱心さの表れと言えるでしょう。

この他、戦前まで錦田の石工の家の床の間に聖徳太子が飾られていました。

こうした太子信仰は昭和 30 年代までに修行した職人達には深く根付いており、その頃の親方は、正月や太子講の日に太子掛軸や太子像を飾り、1 日・15 日の朝は太子像を拝礼した後弟子達にこずかいを渡し休日となっていた。

(4) 聖徳太子信仰と職人

なぜ、聖徳太子は職人の守り神なのでしょう。それぞれの職人から一致して「職人にとって最も大切な曲尺 (かねじゃく) を発明したのが聖徳太子さんだから」という答えが返ってきます。曲尺は平方根の答えが簡略に出たり、角度を分割できるなどさまざまな使用法があり、職人には重宝な道具です。



三島鳶職人組合で祀る太子像



錦田の石工が飾っていた太子講掛軸

太子没後(622年)から中世にかけて『日本書紀』(720年)・『聖徳太子伝略』(992年)を基本史料として太子信仰は、さまざまな伝説に彩られていきますが、仏教を日本に定着させた功績を中心に、その超人的な行動への賛美が主たるものでした。

特に平安・鎌倉時代の宗祖達は太子へ寄せる思いが篤く、空海上人・親鸞上人・日蓮上人・一遍上人などは、太子の陵(大阪府磯長、現在の叡福寺)や六角堂(京都市、聖徳太子が建てた)に籠り、いずれも靈感を得て、布教活動の転換点となっています。

また真言宗や浄土真宗系の寺院を中心に聖徳太子像(二歳像、七歳像、十六歳像、摂政像)や聖徳太子絵巻が盛んに作成され信仰の対象となっています。特に浄土真宗系の寺院では親鸞上人が親と慕っていたことから、本尊の横に聖徳太子が据えられていることが多く見られます。

職人の守り神としての聖徳太子や太子講が記録に現れるのは江戸時代に入ってからです。江戸では、元禄8年(1695)大工仲間が結成され、同11年(1698)には十一職の統制的機構として「太子講」が結成されました。駿府(静岡市)に残る記録では大工と左官の太子講があったことがわかります。西大工町太子講は、延享4年(1747)4月に組織されています。また左官仲間の太子講も続いて結成されたようで、寛政7年(1795)正月の太子講帳面が残っています。



「聖徳太子尊」石造物
(富士市大淵 太子堂)

富士市大淵の太子堂には、台座に駿府の棟梁と地元の大工石工の名が刻まれた天保6年(1835)の「聖徳太子尊」石造物があります。

このように江戸時代末頃には全国的に太子講が組織されたようで、現在でも全国各地に職人達が守る太子堂・太子講を見ることができます。

三島の太子講がいつ頃組織されたかは不明です。しかし蓮馨寺

の太子堂の中に「駿州沼津宿」が入る木版刷り聖徳太子像掛軸(写真右)が残されていることから、他と同様江戸時代末には組織されていたと考えられます。

明治20年代～30年代の太子講領収書が蓮馨寺太子堂に残されており、ここから正月・五月・九月には、三島の料亭で太子講が催されていたことが知られます。

また奉納されている



聖徳太子像掛軸
(三島 蓮馨寺太子堂)

聖徳太子木像の一つには明治27年(1894)三島田町脇田亀太郎が願主として墨書されています。このことから、職人の連携親睦組織としての「太子講」の賑わいと共に、職人個人の太子への信仰が広く浸透していたと考えられます。

聖徳太子が建築関係職人集団の紐帯となり、特に職人の守護神と信じられている背景には太子存命当時の職人集団から現在に続く職人の系譜を考慮に入れなければなりません。古代の大寺院、法隆寺・四天王寺などは聖徳太子の発願寺であり、これらの寺院を建てた職人は司馬氏を始め大陸からの渡来人でした。彼らは仏教や大陸文化全般に理解が深く、優れた人格者であった聖徳太子に親近感と尊崇の念を持ったことは想像できます。

『日本書紀』によると太子が亡くなった時、諸王諸臣から百姓は悉く、愛児を失い慈父母を亡くしたように嘆き悲しみ、日月は輝きを失い、天地も崩れんばかりと記されています。この時、渡来人の文化を最も理解し、大きな精神的後ろ盾であった太子を失った職人集団も又大きな喪失感に襲われたことでしょう。太子没後からさまざまな伝説が発生していったのと同様、建築職人集団の技術が日本に定着し代々受け継がれる中で、聖徳太子に対する崇敬も、曲尺発明伝説と共に伝えられた可能性が考えられます。

企画展「なかざと村」報告

平成 12 年 3 月 19 日 (日) ~ 5 月 28 日 (日)

会 場 1 階 展示室

入 館 者 18, 525 人

展示資料 245 点

(5) コンビナート反対運動の幟とたすき

(6) 中郷村の教育

(7) 中郷村の変貌

三島市との合併の過程

下田街道沿線の変化

1. 展示内容

(1) 中郷村の成り立ち

中郷村の地図

中郷村役場・消防団

(2) 中郷村の集落とまつり

村絵図 (青木・新谷・安久・大場・中島)、
オテンノウサン、サイの神の曳き車、各集
落のまつり

(3) 水とのたたかい

温水池関係資料、中郷用水道路計画図、大
場川北沢地区ショートカット図面、水害関
係資料

(4) 中郷の農業

中郷各地の秋まつりなどを回りながら、聞き取
り調査を行い、資料をお願いして回り、多くの協
力を得ることが出来ました。

昔から穀倉地帯として知られる中郷地域ですが、
昭和 40 年代からの変貌は激しく、水田が宅地化
され、工業、商業用地化しています。

水田と集落を守るために用水を守り、水害に立
ち向かった中郷村の人々のさまざまな側面を紹介
しました。

中郷地域からの来館者は多く、年輩の方々には
なつかしく、子供たちには変化の様子が一目でわ
かる展示となりました。



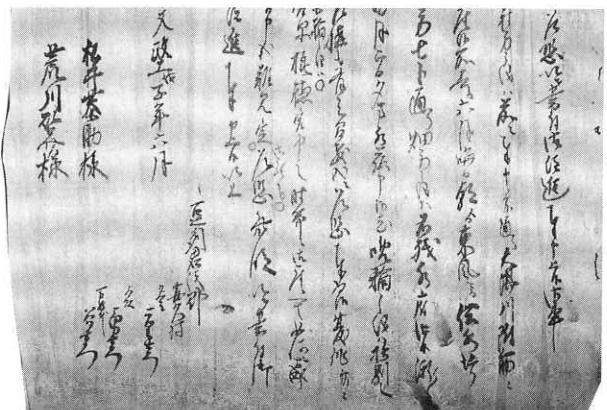
企画展「なかざと村」展示風景



昭和初年頃の青木村全景図
(鈴木肇氏筆)



昭和 7 ~ 10 年頃、8 月大雷雨後の大場川の増水



文政 11 年 (1828)、安久村の水害報告

ふるさと講座 「中郷村を歩く」

平成 12 年 3 月 22 日 (水) 参加人数 35 名

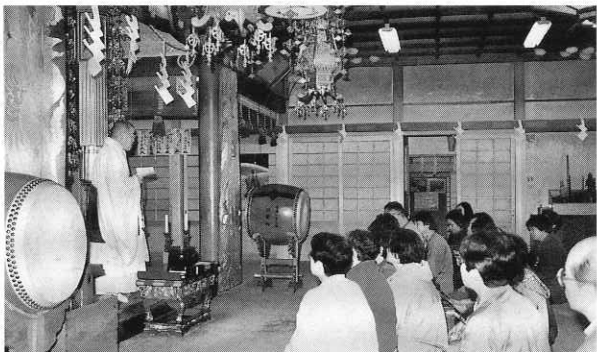
講師 梅名郷土史研究会 小泉安三氏



中島・左内神社

郷土資料館企画展「なかざと村(中郷村)」見学→開田院(大場)→左内神社(中島)→右内神社(梅名)→秋山富南の墓(安久)→蓮久寺・蔵六寺・神明宮(御園)→泉福寺・鍬戸神社(長伏)→高橋神社・宗徳院(松本)→中郷温水池→楽寿園駅前口

企画展「なかざと村(中郷村)」に関連し、実際に中郷地区を探訪しました。はじめに資料館展示室で、地域の行事や受け継がれた資料の解説をしました。そしてバス、徒歩にて、中郷地区の神社仏閣をはじめ日頃気づかない史跡を訪ねました。



御園・蓮久寺にて住職の講話



中郷温水池

企画展関連講座 「日本の名工・職人を訪ねて」

平成 12 年 7 月 6 日 (木) 18:30 ~ 20:15

講師 旅芸人 福尾 野歩氏

会場：三島市民文化会館 大会議室

三島市北田町出身で、幼稚園、保育園等で子供の遊び歌を広めている福尾さんは、地方講演の合間に職人の仕事場と神社をたずねることをライフワークとしています。福尾さんが日本各地で訪ねた名工・職人たちのエピソードを作品もまじえながら紹介しました。



熱のこもった福尾さんの講演

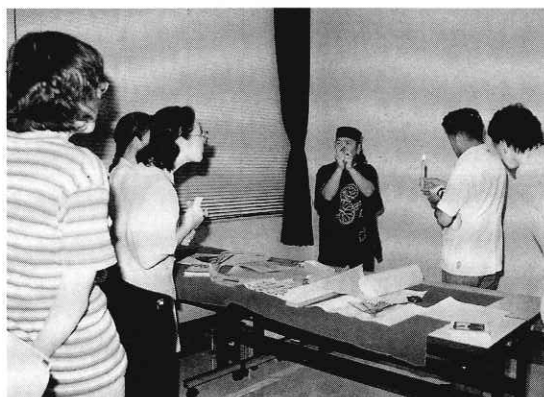
語 録

「街の人たちが街の職人の作ったものを使わないようではだめ。職人の仕事は、作り手とそれを求める人のつながりで成り立っていた」

「人が伝え、残していくのが職人の仕事」

「例えば、職人は同じ物を 100 個作る、工芸作家は違うものを 100 個作る。同じ物を常に作れるのが職人のすごいところ。」

職人の伝統的モノ作りの精神を軽妙な、そして辛口の中に人々の生活や街のあり方などを語りました。



福尾さんの集めた各地の職人たちの“技”を見ながら

平成12年度 三島市郷土資料館 行事予定

1. 企画展示

| テ ー マ | 開催のねらい | 実施予定日 | 展 示 内 容 |
|-----------------------------|---|--------------------------------|--|
| ① 3市博物館共同企画展 「くらしを支えた職人」 | 工業製品があふれ機械化がすすみ、残りわずかとなった職人たちを取り上げ、その仕事を紹介する。 | 7月2日(日) 9月3日(日) | ・職人の世界 ・三島の職人(紺屋・三島傘・下駄屋など) ・職人の信仰 |
| ② 企画展 「未来への伝言」 | ここ100年間で驚くほど変わった日本人の生活を衣・食・住と子供の遊び、米作りを通して紹介する。 | 10月29日(日) 平成13年 2月25日(日) | ・衣食住の変化 ・子供の遊び ・米作りの機械化 ・町や村の変化 |
| ③ 企画展 「三島宿」 | 江戸時代、東海道の宿場の中でも特ににぎやかで有名だった三島宿の様子を各種資料を通して紹介する。 | 3月18日(日) 5月27日(日) | ・三島宿復元模型 ・三島宿の浮世絵 ・三島暦 ・本陣と問屋場 |

2. 講座・講演会

| 講 座 名 | 日 程 | 講 師 | 内 容 | 対 象 他 | 募 集 期 間 |
|------------------|--|-------|--------------------------------------|--------------|-----------------|
| 縄文土器作り (3回連続) | ① 7月26日(水) ② 7月28日(木) ③ 8月25日(金) | 館 職 員 | ① 土練り (半日) ② 成形 (1日) ③ 焼成 (1日) | 小学生 5～6年生 | |
| 夏の郷土学習 (野外学習) | 8月3日(木) | 高林保巨氏 | 藍染め体験 | 小学生 4～6年生 | |
| 郷土教室 (体験教室) | 7月8日(土) | 瀬川 到氏 | 竹ざいく | 小学生 4～6年生 | |
| | 11月11日(土) | 辻 真人氏 | 古代の生活を体験 | | |
| | 12月9日(土) | 鈴木辰己氏 | 昔の道具を使ってみよう | | 11月15日～30日 |
| ふるさと講座 | ① 10月3日(火) ② 10月13日(金) | 迫田信行氏 | 三島の名利を訪ねて I・II | 市 民 | |
| | 11月17日(金) | 鈴木勝彦氏 | 箱根日金道を歩く | | 10月1日～11月2日 |
| | 平成13年 3月22日(木) | | 三島宿を歩く | | 2月15日 ～3月10日 |
| 企画展関連講演会 | 7月6日(木) | 福尾野歩氏 | 「日本の名工・職人 を訪ねて」 | 市 民 | |

★博物館学芸員実習生

7月21日～30日・9月14日～24日まで学芸員資格取得希望する博物館実習生を受け入れました。

今年度は日本女子大学、法政大学、専修大学、奈良女子大学、立正大学大学院より計5名が本館の博物館活動に参加し、縄文土器作り教室のサポートや、資料の整理等に実際の活動を研修しました。

★今年度の職員紹介

館 長 杉村 齊

副主任 畑中めぐみ

主 事 関 洋和

嘱託 山本 武雄

主任学芸員 福田 淑子

嘱託学芸員 竹之内 修

◆新収蔵資料

郷土資料館に次の方々からご寄贈いただきました。
ご協力ありがとうございました。(敬称略)

平成12年2月～8月 寄贈分

| | |
|-----------|-------------|
| 岩崎 節子 長泉町 | 鈴木 信雄 三島市佐野 |
| 焼き鋺 2点 | 動力式脱穀機 1点 |
| 和裁物差 2点 | へっつい 1点 |
| など 合計7点 | 合計2点 |

| | |
|-------------|--------------|
| 大隅 英一 三島市大場 | 長野 清子 三島市幸原町 |
| 氷冷蔵庫 1点 | 軍需カバン 4点 |
| パン焼き器 1点 | 教育漫画絵葉書 1組 |
| 炭火アイロン 1点 | 国鉄職員帽 1点 |
| など 合計9点 | 尺八 1点 |
| | 紵け台 1点 |

| | |
|--------------|---------------|
| 河野 茂雄 三島市大宮町 | 卒業証書(昭和7年) 2点 |
| 酒樽 1点 | など 合計40点 |
| 石臼 1点 | |

| | |
|---------|-------------|
| 桶 2点 | 藤本 留雄 三島市梅名 |
| 牛乳缶 1点 | 養蜂用具 |
| など 合計6点 | 遠心分離器 1点 |
| | 給餌器 1点 |

| | |
|------------|----------|
| 櫻 衛男 三島市梅名 | ろ過器 1点 |
| 箕 2点 | 噴煙器 1点 |
| おひつ 1点 | 蜜刀 1点 |
| 茶缶 2点 | 茶樽 1点 |
| 桶 4点 | など 合計12点 |
| など 合計19点 | |

| | |
|-----------|--|
| 米山みちこ 沼津市 | |
| 行李 1点 | |

◆次回企画展のご案内◆

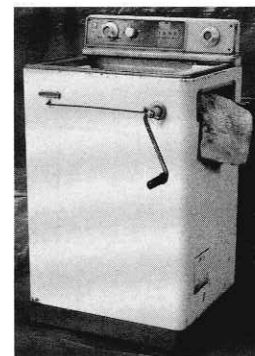
未来への伝言

～くらしをささえたモノ・もの・物～

平成12年10月29日(日)
～平成13年2月25日(日)
三島市郷土資料館 1階にて

わたしたちは今、20世紀最後の年から21世紀への境目にいます。大きく時代の移り変わります。この時、時代のものさしの一目盛として、次の世代にどんな印象の歴史の1ページとして伝えることができるのでしょうか。

郷土資料館では、私たちの父や母、おじいちゃんやおばあちゃんたちが使っていた懐かしい道具や物をたくさん集めてみました。また、その一方で、この1世紀の間に目を見張るような著しい進化を遂げた新しいモノも集めました。

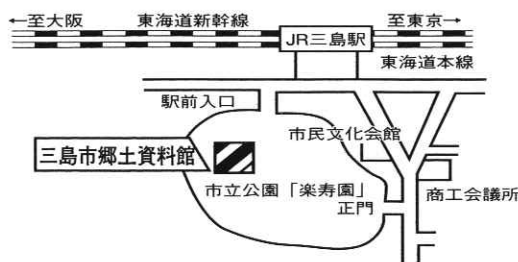


一堂に集めた新旧のモノの中から未来への伝言のヒントを見つけてみませんか。

「アッ、こんなのあったけ」

利用案内

休館日 毎週月曜日(祝日の時は翌日、12月27日～1月2日)
開館時間 午前9時～午後4時30分(11/1～3/31まで)
入場無料 (但し、楽寿園入場の際、有料)



三島駅(南口)から徒歩5分。市立公園楽寿園内

郷土資料館だより No.67

発行日 平成12年(2000)10月1日
(年3回発行)

編集 三島市郷土資料館
〒411-0036 三島市一番町19-3
楽寿園内

TEL 0559-71-8228

FAX 0559-81-3730

E-mail: kyoudo@city.mishima.shizuoka.jp

URL: http://www.city.mishima.shizuoka.jp/kyoudo

発行 三島市教育委員会